

淨土

1976-6

昭和十年五月二十日（第二種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運轉省（特別授承認雜誌）第三二五号
昭和五十一年五月二十五日印刷 昭和五十一年六月一日発行
第四十二卷 第六号





無我

送河



無我

藤原了然

(仏教大学学長)

△無我△とは、仏教語としては極めてありふれた言葉である。

しかし、その内容いかんを問われることになると、これは大変なことである。

愚考によるならば、無我を外に探求することは、あたかも地平線を追うようなものではあるまいか。

無我の境は永遠の彼方にあるようにも思えるが、再思内観すれば無我は足下に厳然としているという祖師方の教示が心にしみる。

しかし、その全き体語となると、自らの行の乏しさが恥じられてならない。

畢命を期としてという行修に命すべきであろう。

思想的には無我とは念仏のウラウチといってもよいのではあるまいか。

六月号



目次

古い国旗に先師を偲ぶ……………	村瀬秀雄……………(2)
浄土訪問 北沢杏子女史に聞く「仏教と性」……………	……………(7)
現代とこころのシリーズ⑤	
法律家のこころ……………	村下武司……………(12)
いのちの教育……………	小野泰博……………(15)
南国の旅情(一)……………	長谷川宣丈……………(20)
浄土教の流れ(八六)南無三宝……………	竹中信常……………(25)
法数術語十二カ月(六月の巻)……………	宝田正道……………(30)
日 本 仏 教 の 宗 派 ① 南都六宗(一)法相宗……………	……………(34)
念仏ひじり三国志(二十六)法然をめぐる人々……………	寺内大吉……………(37)

表紙 久住 静雄画

カット 大正大学美術部

古い国旗に先師を偲ぶ

村瀬秀雄
むら せ ひで お



◇

昔話を持ち出して、今更述べたてことは誠に恐縮であるし、失礼なことであるとも思う。しかし近頃になって先師の恩徳を偲ぶ思いが頻りであって、これも年のせいから老人の仲間入りをしたことを認めるものであり、自然の成りゆきというものであろうが。予めご寛容の程をお願いしておく。

さて私は、かつて出征した時に諸先生からご署名と饒別の辞とを認めていただいた国旗を二枚、大切に保存している。このような国旗は、本来ならば軍服の上に褌にかけて、多くの人々に見送られながら内地を發ったはずである。ところが、私はこの国旗を持参せずに家においたままであったので、シベリヤを廻って帰ってきたのに拘らず、今なお手許に残すことができたのである。私が再度の応召をうけたのは昭和二十年四月初旬のことで、その時分の軍隊には応召の兵士に持たせる銃がなく、腰に下げる剣すらなかった位であった。口にこそ出さなくても多くの人々は敗戦を肌で感じていた頃である。それに加えて私の住む村では八割までが大火に罹災して焼け出され、まだ余燼の燼る中を發ったのである。送ってくれた人というのは、行李を肩にした実兄と義兄との僅か

以外の何ものでもないな。しかし西行は別だと思う。彼は漂泊しつゝ、歌に身体ごとぶっつけてゆく。歌心のなから如来の心を、さぐり出そうとしておる」

「それが、おわかりですか」

どぎり、となった。

先日、明遍から聞いてきた西行観の受け売りだったからである。

では、それを体現したどんな歌詠があるか、と小法師に突っこまれたら、どうしようか、と重源は不安になった。

しかし小法師の面上はやわらいだ色でおおわれた。

「重源さまもそうお感じになりますか、西行さまの歌に」

「そう、思う」

「私がかねがねそう感じていたのですが、文覚さまが余りにもお嗤いになるので」

先輩の僧の一人にでも合意を得たことがよほど嬉しいらしい。

「文覚なぞは、歌色紙で鼻クソをほじくる男だ」

明恵上人が深い歌心をいだき続けたのは事実である。

しかし若いころを除くと作品を残していない。

伝記によると、西行から仏法と歌詠との深い結びつき

を教示されたことがあるらしい。

十八歳マデ詩賦ヲ稽古シテ風月ニウソブキシニ、ソノ興味深クシテ他事ヲ忘ルルホドナリキ

として、十八歳でふつとりと明恵上人は歌から離れてしまふ。

偶然の一致かも知れないが、彼十八歳の建久元年（一九〇）は、西行法師が寂した年でもあった。

西行を歌心の師と仰ぎ、彼の死とともにふつりと断絶してしまった明恵上人に、何か爽かなものを感じないではおられない。芸術に淫することを強くいましめたのであろうか。

夢体験を克明に綴ったり、仏跡の印度を恋いこがれたり、明恵上人の生涯そのものが、宗教者というよりも芸術家の体臭を、われわれは強く感じるのである。

こうした香気高い旧体制者が、また新鮮な新仏教者を生み出す素地も作った。乱世とは言いがた、この時機こそ日本仏教のほのぼのとした夜明けでもあった。

（つづく）

＜印度の仏跡・靈鷲山（ラージギハ）＞



「歌を詠むことは、仏道の妨げになるのではないでしようか」

「……」

「歌心と仏法とは、そむき合うのではないでしようか」

鋭い質問に重源は返答に窮した。

仕度第一の俊乗房である。殆んど歌心なぞには通じていなかった。アテずっぽで答えるしかない。

「あちこちの僧正どもが詠みこむ風鳥歌詠、あれは妨げ

の歴史に甚だ重要な意味合いを持つてくる。

念仏ひじりたちが大同団結をしたとは言ってもこの「選択集」が編述された時点で、必ずしもひじりたちの歩調はそろっていたとは言えない。ラジカルな宣言書が先行独走してしまつたとおもひがある。

例えば老齢だつたとは言え、俊栗房重源は専修念仏の群れに投じていなかったし、明遍僧都も圏外に立っていた。また法然自身が「興福寺奏状」という批判を受けると、「七箇条の制誡」を発して、ひじりたちに署名させてラジカルな暴走をいましめている。

「選択集」が持つ過激性と、法然上人自身の寛容で温和な人柄とが、その後永年にわたつて念仏門徒を分裂させたことも否めない事実である。浄土宗と本願寺教団と対立にそれを覗くことができる。

慈円和尚が「愚管抄」できびしく専修念仏者を批判したのも（その批判は法然その人にまで及んでいるが）、こうした二元性の隙間へ筆誅を刺しこんだものであった。

ともあれ念仏思想が持つ広々とした領域を、「専修念仏」で極限されて、慨嘆し震撼させられたのが明恵上人の「摧邪輪」であつた。

その明恵上人が、未だ十三、四歳の小法師として俊房重源の前に立っている。

「さっき西行さまのお話が出ましたが」

少年は涼かな眼もとにひときわ玲瓏な光りをたたえた。

「西行を、知っているか」

「はい、しばしば此方へ……」

「文覚はあの人を余り買っていないようだが」

「お帰りになつたあと、いつもお喋りになります」

「うむ。それで」

「私は、西行さまのような僧になりたいと念じております」

「西行のように歌も詠みたいか」

「出来ましたならば」

「そういえば、叔父御の上覚聖人も歌道には通曉してはたはずだったな」

少年の文化的基盤がうかがい知れた。それだけに荒法師文覚と同居している現在には、水と油と言わねばならぬ。

「お訊きたいことがあるのです」

「何だ」

も上人を誹謗したことがなかった。たとえ他人の話
を聞いてもそれを信用したことがなかった。しかし
ながら近日、この「選択集」を披閲してみると、悲
嘆はなほだ深く、はじめ書名を聞いたときには上人
のすぐれた著作に礼拝することをよろこんだが、著
作を読んだいまは念仏の真実の宗旨を翻しているの
を恨んでさえいる。

と「摧邪輪」(現代語訳「法然」中央公論社版)は冒頭で
卒直な批判を打ち出している。さらに、

上人(法然)が入滅することになると、ますますこの
邪説が盛んに行われるようになり、もっぱら板木に
文字をちりばめて後代の重要な宝物とし、長く一門
に流布して、仏の經典の如く敬い重んじており、総
体的にこの書を極楽往生を目的とする宗派の肝要で
あり、念仏者の秘府であると考えている。それであ
るから、たまたまこの書を非難するものがあると、
非難することの過ちを、念仏そのものを非難する過
ちに転嫁してしまい。まれにこの書を信じる人に出

会うと、信じることの功德を往生そのものを信じる
功德になぞらえてしまう。そして、ついには同一の
味であるべき仏法の雨に、甘いと酸(から)いの味の
区別をしてしまい、和合している衆僧たちを不和に
する過ちをおかしてしまう。何とそれは悲しいこと
だろう。

(前掲現代語訳「法然」)

とも書いている。

三

正統の仏法。それも釈尊のもとに帰一団結すべきだ
という信念に燃えてきた明恵上人にとつて、分派意識も濃
厚で、旧仏教への袂別宣言にもひとしい「選択本願念仏
集」は耐えがたい悪書だったにちがいない。しかもそれ
が日ごろ敬愛の念をささげてきた法然上人の述作だと聞
いては、なおさらであらう。情念の人、明恵は血涙をこ
めてこの「摧邪輪」を書いたはずである。

「選択集」については、あとでくわしく触れるつもりで
あるが、明恵が投じた批判の一石「摧邪輪」は念仏教団

った。

「私もお相伴しようか」

と、その飯を食べはじめ。七人分、八人分を平げて、再び山中へ姿をくらましてしまう。

食い溜めである。食い溜めをしては、俗事を避けて修行三昧だ。

明恵上人が、自分の見た夢を克明に記述したのは有名な話である。

正統仏教とは、もちろん釈迦牟尼如来への回帰である。ほんらいが明恵上人は芸術家肌、情感豊かな人であった。だから釈尊への回帰は、強烈な思慕の情となる。仏跡の地、印度を憧憬した。さまざまな記録を集めて、印度への旅を計画する。

しかし計画だけに終わってしまう。

明恵上人は、これほど情念の僧であつたから、後生としての浄土信仰には早くから目ざめていた。当代随一の念仏ひじり、学徳兼備の法然上人には深い尊敬の念を寄せてきた。

ところが建久年間の末、法然上人は盟主となつた専修念仏のひじりたちを糾合して新しき教団浄土宗を樹立す

る。その教義綱領を盛りこんだ「選択本願念仏集」は披読して、明恵上人は愕然となる。

法然念仏を敬愛してきたのだが、ここにはきわめてラジカルな専修念仏思想が盛りこまれていたからだ。聖道門をきびしく否定し、明恵の永年にわたつて抱きあためてきた仏法の理想上の境地だつた「菩提心」を蹂躪する筆法で「選択本願念仏集」は全篇をつらぬいていたからだ。

明恵上人は反駁文の「摧邪輪」を書いた。

前略

ここに近ごろ、ある上人がいて一巻の書を著作し、その書を「選択集」と名づけた。その書は經典や論書の趣旨を惑わし多くの人を欺いている。その書は、極楽へ往生するための実践を宗(むね)としてゐるのだが、かえつて往生のための実践を妨げてゐる。明恵は、年来、聖人(法然)に深い信仰を抱いていたから、耳に入ってくるさまざまな邪惡な見解は、在家の男女たちが上人の高名をかりて、かつてなでたらめを説いているものと思ひ、いままで一言

「あのお方には、そんな気配は微塵もございません」

大人のような口をきいた。

「では、何を教えてくれるのだ」

「近ごろ、巷には念仏ひじりとか申す不戒者が充満している。戒律を踏みにじり、念仏だけ唱えておれば、救われるなぞとホザきおる。これに対して南都、北嶺は放任するままだ。仏法は滅びる。正統な仏法を伝えるのは、この文覚唯一人なのだ。だからお前は、わしの言うことを守って……」

仏法の正統の修行、教学にいそしんでいると言うのである。

この日、このとき、俊乗房重源が少年明恵上人の言葉、どう受け止めたかは、推量の限りではない。

だが、この二人が正統仏法の継承者として挺身した情熱と行動は、歴史が高く評価している。

文覚ハ行ハアレド学ハナキ上人ナリ。アサマシク人ヲノシリ悪口ノ者ニテ人一イワレケリ。天狗ヲマツルナドノミ人ハ云イケリ。

慈円和尚は「愚管抄」で嗤っているが、彼なりの軌道上で政事に暴走をくり返した文覚も、目的は唯一つであった。個人の野望や権力慾ではない。旧仏教の興隆だ。

たしかにその暴走は、どこまでいっても知らなかった。この時点で重源が疑惑の視線を投げかけたように、文覚は神護寺再興のために法皇から下賜された莊園を政治資金に流用したりしている。また重源に協力して集めた東大寺勸募金にも使途不明のものがあって、問題をおこした。

だが、時間のずれはあったが、やがて立派に神護寺を復元し、東寺までも再興している。文覚が政治という複雑なパイプをとおしたための屈折と見なければならぬ。そしてこのパイプを通さなければ、これだけの大仕事も出来なかったであろう。

こんな師僧と、およそ不似合いな人生行路をたどったのが明恵上人だ。

神護寺の工事が軌道に乗りはじめると、彼にはそんな「俗事」がわずらわしくてならない。愛宕山の奥へ逃げこんでしまふ。だがそこでは食い物もロクにない。ふらりと工事場へ姿を現す。折から大工たちは昼飯の最中だ

文覚は再興のために後白河法皇から播磨の莊園をもらい受けているはずだ。大殿の軀体ぐらいは復元していても良さそうなものだ。

それが、わずかに一對の石灯籠が新調されていただけなのである。

大殿へ重源を案内しようとしないう文覚の奇体な態度が、これで理解できた。

「大工もはいつておらぬな」

小法師に訊いた。

「先月までは二人ほどもいました。でも手間も払わぬために、来なくなりました」

だが、この小法師も本房再興には余り気乗りがしない様子だ。

「小法師は、何で文覚聖人のところへ？」

重源は崩壊したままの大殿前、礎石に腰をおろした。さつきからこの小法師に何となく魅かれるものがあつたのである。

「叔父がこの下、梶尾の高山寺にいましたので」

「何という御房か」

「上覚と申します」

「おう、あの上覚か」

「ご存じで」

「うむ。奈良の東大寺で何度かお逢いしたことがある。心おだやかな徳者だ。上覚聖人の甥であるそなたが、なぜまた文覚の……」

先刻来の疑問が再び重源に湧いてくる。いかにも不釣合いな師弟に見える。

この小法師。後になって梶尾の明恵上人と名乗った人である。彼もまた鎌倉初期における名僧の一人だった。

ある日、文覚が高山寺にやって来て、明恵上人をひと眼見るや、

「コノ小法師、権者（ござ）ナリ」

と呟いて、強引におのれの草庵へ連れていったという。権者とは、ただならぬ者という意味である。こうした

異能人の養育は並みの人間では駄目だ。わしが看てやろう、と文覚は申し出たわけだ。

「可愛がってくれたのか」

重源は世事に馴れた眼で、少年を見つめた。文覚の衆童趣味か、と探ぐりを入れたのである。その意味を、明恵はすぐに察して、

ってくる。

要するに文覚という人は、この「六代」が源家に謀反をおこせば、必ず加担する人なのだ、と断ずる。自分とて幼児に加担してもらったのだ。同じ文覚の「正義感」がこんどは平家の嫡流への同情となつて移転してゆくであらう。

いかにも頼朝らしい猜疑心だが、「平家物語」は、朋輩の妻に恋をしてその夫と対決するつもりで彼女を殺し、出家した文覚の人間像、頼朝の猜疑心を借りて鮮かに浮彫りさせると言えるであらう。

とにかく文覚は、乱世を象徴する荒法師であつたことはまぎれもない。

二

さて重源だが、文覚の政治談義が少々迷惑になりはじめていた。

今日来訪の目的は、西行法師の所在をたずねに来たのであり、もう一つは文覚が命をかけて再興している神護寺の建築状況を視察したかったのである。

「大殿に参詣したいと思いますが」

「大殿か。あんなものを見てもどうにもなるまい」

奇体な返事がかえつた。

「しかし復元状況を見せて頂くことは、大仏殿の工事に大いに役立ちます」

「役立つほどのものは未だ出来ておらぬ」

ひどく冷淡なのである。

それでも、と囑望すると、

「小法師に案内させよう」

と文覚自身は、そっぽを向いた。

文覚の草庵から神護寺本房までは二キロの山道を登ってゆかねばならない。

なぜ文覚がその本房に住していないのか。理由が重源にはすぐわかつた。

たどりついた山上の本房は、荒れはてたままだつた。

それこそ「扉は風に倒れて落葉の下に朽ち、薨は雨露に犯されて、仏壇さらに露なり」(平家物語)なのである。

つまり文覚が再興を発願して、すでに十年近く、その半ばは伊豆で流罪生活だったとは言え、殆んど手付かずの状況だった。

ことは廟堂を紛糾させるばかりである。

自分は頼朝と兼実の心結び合わせるべく下工作をしなければならぬ。これに後白河法皇も加わって、三者一体となってこそ、この乱世は終息するであろう。

寿永から文治へかけて、政治の潮流はたしかに文覚の構想どおり、うごいてゆく。後白河、頼朝、そして関白から太政大臣にまだ昇った九条兼実、三者が心を合せて源平争乱の戦後を收拾した。

しかしこの潮流作りに文覚自身は、どんな役割を果たしていたのだろうか。

九条兼実の眼に映じた文覚像は、終始粗野な荒法師であって、緻密な政治感覚が兼実の身辺まで匂ってきた、という形跡は絶無である。

ちなみに兼実は日記「玉葉」で、寿永三年四月二十九日に、

坂東荒聖人聞覚（文覚のこと）、今日参院。広座ニ
オイテ種々荒言ヲ吐ク、云々。

と書いている。

この寿永三年四月末は、すでに平家が一ノ谷でやぶれ、屋島へ落ちてしまったところである。

また兼実が右大臣から関白へ親補したのは文治二年、つまりこの二年あとであるが、その間の「玉葉」に文覚の名は殆んど登場して来ない。わずかに頼朝の父、義朝の欄腰を、それもほんものをもらい受けて鎌倉の頼朝のもとへ持参したという記述があるだけである。

その頼朝とも、やがて文覚は平重盛の孫「六代」の処置をめぐって決定的に対立する。文覚はこの平維盛の遺児を助けるべく、神護寺にその母親と一緒に住ませる。

ところが文覚が後鳥羽天皇を批判して、その兄守貞親王を擁立する陰謀が暴露して佐渡へ流された。その留守に頼朝の刺客が神護寺にあらわれて、「六代」を殺してしまうのである。

なぜ頼朝は執拗に幼い「六代」の命をねらったのであろうか。文覚とは流謫時以来の仲である。それどころか源家再興の旗上げをしきりと説いてくれた盟友だ。その文覚が生命を張ってまで助命を乞うた平維盛の遺児だった。なぜ盟友の気持を頼朝は蹂躪したのであろうか。

「平家物語」は、頼朝のこの心事を巧みな筆致でえぐ

「要心深い男でな。ただ黙然と聞き入るばかりだ。諸か否かを強要すると、返答は同じ言葉を取り返す。さようなことは考えてみたこともござる、とトボける。山中で拾うた誰とも知らぬ髑髏（しやれこうべ）をな……」

これぞ父君義朝公の亡骸（なきがら）だと文覚が示すと、頼朝は涕流して伏し拜（たた）んだ。そのくせ心では露ほども信じていない。文覚が髑髏（しやれこうべ）を置いて、帰ろうとすると呼び止め、「お忘れもの」と手渡したというのである。武人と言うよりも根っからの政治家だ、と文覚は評した。

「頼朝が父を喪ない伊豆へ流されたのは、恰度この小法師の年ごろであつた」

と、小机に向う少年を指さした。

孤独な囚われ人として幽閉され続けてきた頼朝が、いつ何処であんな政治力を身につけたのか、と文覚は不審がる。治承四年八月、兵を挙げるや、いったんは石橋山合戦で破れはしたものの、三浦、上総の勢力をたちまち麾下に従えてしまった。すでに何年から頼朝は檄（ごう）を飛ばし、この日のために手を打っておいたにちがいないのである。

「上総と言えば、この小法師の父者人は当時、安房の目代じやつた」

少年は涼やかな眼もとを伏せた。肌白い顔が、いっそう白く重源には見えた。

「やはり平氏の出で？」

「うむ、紀州有田を領した伊勢平氏の重国という人だ。あのころは目代として安房におり、館を頼朝に攻めかけられ、討死したと伝えられる」

父も家を喪つて、出家してきたんだな、と重源は納得する。

それにしてもこの美目秀麗な少年が、異相も甚だしい文覚の下へ入門するとは、どうした因縁であらうか。

問いただすいとまがない。再び文覚は語勢も騒々しく、政治談義へとのめりこんでゆく。自分が後白河法皇を説いて、さきに平氏に下した頼朝追討の勅勘を説いてやった。頼朝は大軍を擁して京へ攻めのぼり、木曾義仲を駆逐するであらう。さらに西海の平家をも追討するはずである。

その間の廟堂政治は、右大臣九条兼実を中心にして収拾しなければならぬ。旧平家の公卿をみだりに懲罰する

＜義朝の髑髏＞



前号のあらすじ

平家の滅亡が間近にせまった寿永年間、仕度第一といわれた俊乗房源重源は相変らず堂宇の造立に励んでいた。そしてこの度はあの有名な東大寺大仏殿の復興を発起したのである。この事業は治承五年（一一八二）にすでに藤原少将行隆を造仏長官として緒につけていた。法蓮房信空の父である行隆は、重源の勧めによって法然上人を大仏勧進上人に誘ったが、上人は念仏勧進の行を本旨として固辞したのである。

寿永二年（一一八三）、大仏造立工事は木曾勢の京都乱入によって一時中座するが、重源の精力的な勧進行によって、その後着々と進展していた。その頃、伊勢路でゲリラ活動をしていた源義経一行と、重源は八風峠の山麓の陣屋正源院にて再会するのである。その折重源は、弁慶の口から放浪の歌僧西行法師の名をはじめ聞くのである。この西行に興味をひきお感じた重源は、光堂に明遍を訪れ、さらに詳しくその人となりを聞くのである。そして重源の西行への想いはいよいよつのり、その足を高尾の神護寺へと向けるのである。そこには、ある袈裟御前を斬った遠藤武者盛遠、いや盛阿弥陀仏こと文覚上人がいたのである。

がつたえられた直後じゃった。今にして立たずんば源家再興の折はなし、とな。坂東の御家人たちも平相国からみな心離れしておるのじゃ」

「それで、鎌倉どのは？」



念佛ひじり三國志

(三)

—法然をめぐる人々—

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



文覚は倦むところを知らぬ雄弁ぶりで、天下の情勢を説き去り、説き来たる。それはさながら大衆を前にしたアジ演説に似ていた。

ただし、その大衆とは、俊乗房重源ただ一人である。神護寺から二キロほど山裾に下った文覚の草庵だが、聴衆はもう一人いた。縁先においた机に向い、経巻に視

線をさらしている十三、四歳の伶俐そうな少年だった。文覚に随侍する小法師だが、今の彼も明らかに師のアジ演説に耳をかたむけていた。

この乱れた天下を統一する器量人は、鎌倉の源家頼朝以外にはない、と文覚は強弁する。

その器量について。

文覚は数年前彼が伊豆へ流罪中、毎日のように逢っていた頼朝の印象を重源につたえる。

「わたしは頼朝に蹶起を促した。平家の徳者小松内府の死

寺に伝えた第四伝と、法相宗の法灯はたびたび伝来され、この学派の興隆のほどがうかがわれるのである。普通、第一伝と第二伝は元興寺伝、飛鳥伝、南寺伝などといわれ、第三伝と第四伝は興福寺伝、北寺伝などと称される。南都奈良の興福寺、元興寺、法隆寺、薬師寺、さらには京都東山の清水寺などが本宗に所屬し、日本仏教の学問宗として大いに栄えたのである。有名な奈良時代の行基菩薩（六七〇—七四九）もこの法相宗の人であつた。

また鎌倉時代における旧仏教の復興時代には、興福寺の貞慶（解脫上人、一一五五—一二三三）や良遍（一一八四—一二五二）などが中興の祖として現われ、教学を大いに高揚したのである。

現在では、法隆寺が昭和二十五年に聖徳宗として独立したので、興福寺、薬師寺の両寺が約二十カ寺の末寺をもつて大本山として一宗をなしている。また清水寺は北法相宗と称して分派しているのである。（原 裕）

◇仏教一ロメモ◇

色（ルーパ）

色・受・想・行・識の五蘊（自己自身と外界の環境世界を構成する五つの要素）や、『般若心経』の一句で有名な「色即是空、空即是色」に説かれる「色（ルーパ）」という概念についてメモしておきたい。

サンスクリットの rūpa は、①「形作る」という意味の動詞 *rūpa* から作られたもので、「形あるもの」とか「表われたもの」という意味である。また別の解釈では、②「壊す」という意味の動詞 *ru* からできた名詞で、「変化するもの」というような意

味として捉えられる。漢訳語として、「示現」とか「変壞」、「變礙」などが用いられるのもこうした内容からである。いずれにせよ、形あるもの、つまり生成変化する現象世界の物質を指すものとして理解される。しかし狭義にみると、眼根の視覚対象としてのもの（色境、色処、色界）であり、その場合には、たとえば大乘仏教の『瑜伽師地論』（巻第二）では「色」の三様態として整理しているのである。「略説するに三あり。謂く、顯色、形色、表色なり。顯色とは謂く、青、黄、赤、白、光、影、明、闇、雲、煙、塵、霧、及び空一顯色なり（十三種）。形色とは謂く、長、短、方、円、鉤、細、正、不正、高、下色なり（十種）。表色とは謂く、取、捨、屈、伸、行、住、

坐、臥なり（八種）」（大正三三、二七九b）と。ここで顯色とは視覚によって知覚される色彩や陰影のことであり、形色とは形状のこと、さらに表色とは動的な変化の様相を示している。また説明を加えれば顯色の中、空一顯色とは蒼空の色とされ、なかななく青、黄、赤、白と黒の五種は「五大色」ともいわれる。

つまりところ「色」とは、眼根という視覚器官によって認識されるものなのであり、「質礙」とも漢訳されるように、質量をもっているようなものである。このことはおのずから「色」というものが実体的な存在体ではないことを示している。つまり「空」として捉えられるあり方でもある。（H）

（シラバドゥラ、五二九―六四五）によって伝えられたのである。一般に護法の著作を中心とした様訳書である『成唯識論』（『唯識三十論』の註釈書）の訳出によって、この宗旨が形成されたと考えられるのである。すなわち法相宗は、その際の玄奘の訳業の多大な助けをなした高弟慈恩大師窺基（六三一―六八二）を初祖としているのである。この窺基は『成唯識論述記』や『大乘法苑義林章』などを著わしている。

この法相宗は中国十三宗の一つであり、わが国においては日本八宗の一つ、さらに分類して南都六宗の一つでもある。また、法相宗の宗名のいわれは、一切諸法の性（真如）と相（現象）を判釈するに五種に分類し、さらに百法に区分した「五位百法」の教説から由来するものとされ、あるいはまた所依の經典の一つである『解深密經』の卷六「一切法相品」の品名を典拠とするものであるともいわれる。有名な遍計所執性、依他起性、円成実性の三性説が説かれているのもこの章品である。いずれにせよ法相宗の根本教義は五位百法によって現象世界を分類把握し、その根源にアーラヤ識（阿頼耶識）というすべての存在を包括する根本識を立てて、この転変の結

果として現実世界の活動がなされるというのである。そうした存在現象の本性や状態を説明したのが三性説なのである。この宗の所依の經典は俗に「六經十一部論」といわれ、以下に記す經論がそれである。――華嚴經・解深密經・如來出現功德莊嚴經・大乘阿毘達磨經・楞伽經・大乘厚嚴經（六經）、瑜伽師地論・顯揚聖教論・大乘莊嚴經論・集量論・攝大乘論・十地經論・中辺分別論・分別瑜伽論・唯識二十論・觀所緣論・大乘阿毘達磨雜集論（十一論）。

法相宗は、中国においては窺基の後、『成唯識論了義燈』を著わした惠沼（？―七二四）、また『成唯識論演秘』を著わした智周（六七八―七三三）の法相三祖に受け継がれたが、日本においては奈良元興寺の道昭（六二九―七一〇）が入唐して、玄奘から直接教えを受けて白雉四年（六五三）にわが国に伝えたのである。これが法相宗初伝といわれるもので、その後智通（六五八―六七二）、智達（一六五八）が齊明天皇四年（六五八）に伝えたのが第二伝、また大宝三年（七〇三）に、智鳳（？七〇三―七〇六）、智鸞（一七〇三）、智雄（一七〇三）などの伝えた第三伝、さらに玄昉（？―七四六）が天平七年（七三五）に興福

日本仏教の宗派

〔1〕

南都六宗（一）

法相宗

およそ二千五百年前に釈尊がはじめて仏の教えを説かれてから、仏教は時代や風土、あるいはその人々の心に
応じて、様々に変容しながら展開してきた。真理は唯一
のものであっても、人間の理解の仕方や受け止め方によ
って、教説の内容も少しづつ視点を異にしていっただけで
ある。そうしたことから種々に宗旨が分かれ、ことに日
本仏教においては多くの宗派に分派して、現に伝えられ
ているのである。本欄では、こうした各宗派の教えの内
容や由来、あるいはその現況を、不定期ではあるが一々
紹介してみたいのである。

インドの大乗仏教の流れにおいては、中観派と瑜伽唯
識派が二つの大きな学派を形成していた。四世紀から五
世紀にかけて活躍した無著（アサンガ、三九〇―四七〇）や
世親（ヴァスバンドゥ、四〇〇―四八〇）の登場によって瑜
伽唯識派は一応その基本的な論書が成立した。こうした
唯識思想は、無著の『攝大乘論』や世親の『唯識三十
頌』などの論書によって理解できるが、これは真諦三蔵
（バラマールタ、四九九―五九〇）によって中国にもたらさ
れた。これがいわゆる攝論宗といわれる学問大系であ
り、外界と自己の意識がともに実在しない（境識俱空）と
いう真実唯識説の立場であった。こうした真諦の訳業
（旧訳の唯識説）の成果によって形成された教説に対し
て、七世紀の初頭にインドへの求法の旅から帰国した玄
奘三蔵（六〇〇―六六四、『大唐西域記』の著者）がもたら
した新訳の唯識説が、中国や日本で発展展開した法相宗
なのである。玄奘は、無著、世親の後を受けて陳那（デ
イグナーガ、四〇〇―四八〇）、安慧（ステイラマティ、四七
〇―五五〇）を経て護法（ダルマパーラ、五三〇―五六二）に
よって大成された新しい解釈の唯識説、つまり意識の存
在だけは認める（境空心有）方便唯識説を、護法の弟子戒賢

六羅漢

六人の羅漢、すなわち釈尊と、初転法輪で最初にその弟子となった五人の比丘（↓五比丘）を合せていう。

六和敬

六合念法、六和合などともいう。修行者の和合の基本として大乘仏教では特に重んずる六種の和合法。すなわち、身には札押などを同じくし、口には歌誦などを同じくし、意では信心などを同じくし、戒では淨戒などを同じくし、見ではものに対する見解を同じくし、利では夜食などの利を同じくするやり方。

六界

六大、六根、六入などともいう。万有を構成する要素を地・水・火・風・空・識の六界と分別し、また、眼・耳・鼻・舌・身・意の六識に分けるときにも使う。

六観音

六道をめぐる衆生を教化するといわれる六体の観世

音菩薩。すなわち、大悲、大慈、師子無畏、大光普照、天人丈夫、大梵深音の六観音の称。また、台密では、聖観音を地獄、千手を餓鬼、馬頭を畜生、十一面を修羅、不空羂索を人間、如意輪を天に配して、それぞれの能化の主とする習わしがある。

六根

六つの感官。眼（視覚）・耳（聴覚）・鼻（嗅覚）・舌（味覚）・身（触覚）・意（認識）のこと。また、人間の身心全体と見て、「六根清浄」（安全登山を祈るときなどに唱える）を期する宗派もある。

六波羅蜜

大乘仏教で、涅槃に至るための波羅蜜（理想完成）の行として実践すべき六つの徳目をいう。すなわち、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六度（彼岸に渡る道）である。

六方

東・西・南・北・下・上の六つの方角、『阿弥陀経』には、「六方段」と称する節がある。

六波羅蜜（↓）に同じ。

六度は彼岸に至る六つの優れた修行であるが、広くいへば善行のすべてを摂するので、浄土教では念仏以外の一切の善行をさす。

六度万行ろくど まんぎやう

六道ろくどう

六趣ともいう。一切の衆生がその業にもとづいて赴く六種の世界。すなわち、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六つで、凡夫はそれぞれの巷にさまよふところから、「六道輪廻」という。

六道能化ろくどうのうけ

六道の巷に生死を繰返す衆生を導く、地藏菩薩のことをさす。

六難ろくなん

衆生が遭遇する六種の難事。すなわち、仏の出世に会いたく、その正法は聞きがたく、善心も生じがたく、

中国（インドではガンジス河中流地帯をさした）に生れがたく、人の身は受けがたく、一切の善根を具えがたいこと。

六念ろくねん

六随念、六念処ともいう。念仏・念法・念僧・念戒・念施・念天の六つ。中国では、別に比丘のよく知り弁えておくべき日月、夏臘等の六重要事項をさす言葉ともなつた。

六八弘誓ろくはちくぜい

六八願、六八大願ともいう。阿弥陀仏が法蔵比丘のとき衆生を救おうとして誓つた四十八願のこと。「柔願」もこれに同じ。

六部ろくぶ

六十六部の略。『法華經』を書写して一部ずつ全国六十六カ所の靈場に奉納して歩く巡礼僧の一種。近世では錢を乞いながら行脚する僧の別称ともなつた。

さす。

六地蔵ろくじぞう

地藏菩薩を六道(↓)に配し、各自の領域を教化するとしたもので、比丘形であるが特に「六道能化地藏願王菩薩」と総称する。異説も多いが、一般に地獄を檀陀地藏、餓鬼を宝珠地藏、畜生を宝印地藏、修羅を持地地藏、人間を除蓋障地藏、天を日光地藏がそれぞれ受持つといわれている。各地に六体の地藏像を安置する寺も多く、地名にも用いられている。

六時礼讃ろくじらいさん

往生礼讃、六時讃ともいう。唐の善導が浄土往生の行儀の一つとして編纂した讃偈文で、一昼夜を六時(晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜)に分け、それぞれ阿弥陀仏を讃嘆礼拝するようにしてある。鎌倉時代には、これに曲調を付して一般教化の具としたが、現代でも浄土宗では各種法要に用いることが多い。

六重二十二件ろくじゅうにじゅうにけん

浄土宗の安心・起行・作業の種目を六重と二十二の名目に分けた総称。第一重は五種正行(↓)、第二重は助正二行分別、第三重は三心(↓)、第四重は五念門(↓)、第五重は四修(↓)、第六重は三種行儀(↓)とする。

六神通ろくじんつう

六通ともいう。仏や菩薩が具えているという六種の超人的な能力。すなわち、神足通(どこへでも飛んでゆける)、天眼通(自他の未来がわかる)、天耳通(どんな言語や声でも聞ける)、他心通(他人の心を察知する)、宿命通(前世のありさまがわかる)、漏尽通(煩惱をとり去ることができ)の六つ。

六畜ろくちく

六衆生(イヌ・トリ・毒蛇・キツネ・ワニ・サル)のこと。ただし、経によつては、ヒツジ・ヤギ・牝牛・牡牛・ラクダ・ロバあるいはウマ・ウシ・ヒツジ・イヌ・ブタ・ニワトリのそれぞれ六種をさす場合もある。

六度ろくだう



法数術語十二ヵ月（六月の巻）

宝田正道
たから だ まさ みち

を中心にその伝統が受継がれている。

六齋日
ろくさいび

在俗の者が精進齋して戒を守り善事に心がける特定の日として、毎月八、十四、十五、二十三、二十九、三十の六日をさす。

六齋念佛
ろくさいねんぶつ

六齋の日に、鉦や太鼓を伴奏にして念仏を唱える芸能の一種。もと西山派の道空がこれを創めた、と伝えられるが、近世では盆おどりと合流した形で、特に農村青年

六師外道
ろくしげどう

釈尊出世当時、中インドで活躍していた自由思想家群のうち、特にすぐれた六人の師を、仏教側から貶称して外道といった。懷疑主義のサンジャヤ・ペーラツティプッタ、唯物主義のアジタ・ケーサカンバラ、宿命論的自然主義のマツカリ・ゴースーラ、無道德主義のブーラナ・カッサバ、無因論的感覚主義のバクダ・カッチャーヤナ、ジャイナ教の開祖ニガンタ・ナータブッタの六師を

あるが、まだまだこれから大変なのである。それは、一口に「念仏」といっても、そこには少くとも二つの問題が横わっている。その一つはどの仏を念ずるのかということ。他の一つは、どうやって「念ずる」のかということである。

念仏というと「ナムアマミダブツ」で、阿弥陀仏の専売特許のように考えられているが、そう簡単にはゆかないのである。試みに経典の中から念ぜられる相手を拾ってみると、世尊、如来、阿弥陀仏、無量寿仏、弥勒仏、地藏菩薩、不動如来、観音菩薩、勢至菩薩などのほか、諸仏、三世一切仏、過現未諸仏、十方仏、諸仏諸菩薩等々、実に沢山の仏菩薩がある。仏ではないが観音菩薩などは阿弥陀仏について多く念ぜられている。ところが、阿弥陀仏が念仏の代表になるようになったのは「念ずること」を約束の条件とされたからである。もともと『阿閼仏国経』巻下に「若し善男子善女人あり、(仏の)名を聞かば阿閼仏刹に生ずることを得ん」とあって、阿閼仏の名を聞くと浄土に生れることができるとされているが、阿弥陀仏になるともっと丁寧であり、『大阿弥陀経』第四願には、

「我が名号をして皆八方上下無央数の仏国に聞えしめ、皆諸仏をして各比丘僧大坐の中に於て我が功德、国土の善を説かしめん。諸天人民蜎飛蠕動の類、我が名字を聞いて慈心歡喜踊躍せざることをなれば、皆我が国に來生せしめん」(その他第五—八願も衆生の往生を願する)

といって、人間ばかりでなく、鳥やけものやなめくじ、みみずに至るまで救いとして下さっている。その上、『無量寿経』になると先に述べたように、名を聞いて往生できる願が十二にも増え、同時にまた、自分で仏を念ずるものを救ってやろうという約束までされている。そして、『観無量寿経』になると、これが「称南無阿弥陀仏」——ナムアマミダブツと称えなさいとまで、はっきり説かれるようになってきた。ここまで親切に、われわれ凡夫のことを思つて下さる仏は阿弥陀仏のほかにはまずあるまい。それだからこそ、念仏といえはナムアマミダブツだということになるのも、当然のことではあるまいか。

る念仏とが重なって「念仏」ということが早くからおこなわれていたことが知られる。

— 〇二〇 —

このようにして、古い仏教では念仏をはじめとして、いろいろのものが「念じられ」ていた。仏と法と僧を念ずる三念はすでに述べた。三念に戒・施・天の三つを加えたものが六念であり、さらにこれに安般（くわしくは阿波那波といふ）の呼吸のことと休息を念ずることを加えて八念となり、これに身と死の二念を加えたものが十念となった。（今日浄土宗で念仏を十遍唱えるのとは別である）

この中で念天が加わった六念がおこなわれるようになると、それまでインド人の理想とされていた「天に生れる」という思想が仏教に入ってきた、やがては六念の代表である念仏をとனால்天に生れるというのと同じ意味で、「浄土に生れる」という浄土教信仰の芽ばえがはじまったといわれる。（藤原・上掲書・一〇頁）

さらに念身、念死をふくむ十念に至ると、わが身をふりかえり、その最後の涅槃（死）にまで思いを致すように

なり、いわば念仏が涅槃（さとり）に至る修行の一つとされるようになる。いってみれば、念仏特に十念というのが、真実の意味で宗教的になったということである。

しかし、こういった雑多なものを念ずることも大切であるが、毎度くりかえすように、宗教の世界では信仰が深まれば深まるほど統一され、雑多は整理され一つにしなければならないようになる。相手が多ければどうしても力は分散する。一つのものにまとまれば、それだけ專注力は強くなる。こうした筆法からいうならば、三念だ八念だといっているうちはまだ本当の念仏ではない。これが「念仏」——「仏」を念ずるということに統一されて、はじめて力あるものになってくるのである。仏教の歴史の上からいうと、雑多を念じていたのは部派仏教の頃までである。それが大乘仏教の頃になると（すなわち西暦紀元第二世紀頃）仏を念ずる念仏にしばらくのようになつたのである。すなわち、仏教全体がそれまでの教理・教説中心の「理の仏教」から、自分が修行して涅槃に至ろうとする努力修行の仏教「意の仏教」、つまり「宗教としての」仏教へと展開したのである。

どうやら「仏を念ずる」ことにまで立ち至ったわけ

と述べられており、神仏に帰依信順する人を最上の人とする風習が古くからあった。これが仏教にとり入れられて、釈尊の教えの仲間（僧伽）に入る場合の条件とされるようになった。三宝に帰依すること「南無三宝」である。三宝とは仏と法と僧の三つである。釈尊にむかつて、

むづから仏に帰依したてまつる

みづから法に帰依したてまつる

みづから僧に帰依したてまつる

と三たび唱える。これに対して釈尊が、

善来（なんじ来たれ）

とおっしゃれば、僧伽に入ることができたのである。こうして、入団式の宣誓として三師三宝がおこなわれるようになったのだが、それとならんで、宗教的人格者としての釈尊つまり「仏」に帰命し、仏を「念ずる」ことがおこなわれていた。このことは前にも述べたが、このこ

とについて、まことに簡潔に述べられている藤原凌雪氏の一文があるので、ここに借用する（『念仏思想の研究』・七頁）

「当時仏教徒の資格、とりわけ在家仏教徒の規矩としては、帰依三宝即ち三念の形式が使用されていた。三念とは、いうまでもなく念仏念法念僧である。この場合、日夜仏辺に侍った常隨の弟子達の意味した念仏は現在仏、即ち生身の釈尊に対する帰敬、あるいは礼仏という程の気持だったであろう。それが、時間的に地理的に仏と離れている場合でも、これを追慕憶念してその徳を讃え、また恐怖や危難に当ってその加護を乞うという依憑の心を起さしめ、やがては憶念の仕方というようなことにまで発展し、仏の十号や十力、四無量心等（仏陀のすぐれた精神的特徴・筆者註）を憶念するとか、三十二相（仏陀の身体的特相・筆者註）を観ずるとかいう儀則を生じ、さらに後には釈尊だけでなく、他方世界の諸仏をも所念の対象としたものであろう」

つまり、念三宝の中の念仏と、宗教的人格を対象とす

四七―四八)。阿弥陀仏の名前を聞いただけでも大変な功德があるというのだから、その名号を自分がとなえたら、さらに大きい功德——つまり往生が得られるわけである。それが再三出てくる第十八願で、約束中の約束である。

ところで「名前をとなえる」ということを、なぜ「念仏」——仏を念ずるというのであるか。これには長い念仏の「歴史」がこめられているのである。

釈尊がまだこの世においていた頃は、分らないこと、困ったこと、思い悩むことがおこなわれたら、釈尊の所へ行つて、じかに解決して貰うことができた。だが、釈尊がたまたま遠方まで教えをひろめに行つて不在の際はどうか。そんな時、困ったり、悩んだりした弟子は「ああ、お釈迦さまにお会いしたいなあ」と思つたにちがいない。そうしたことから、弟子たちは目の前に釈尊がおいでにならずとも、釈尊のことを心に浮べたり、じつと考えてみたりしたことであらう。これをお経の中では思念とか随念とかと書いている。こうした気持であるところに釈尊がなくなられた。弟子たちは、も早やこの世で再びお会いすることができなくなった釈尊

のことをひとしお強く思い出し、なつかしむようになる。そして、在りし日の釈尊のことを心に思い、念じて、みづからをなぐさめていたであらう。このことを憶念とか追念とかという言葉であらわす。

こうした心情の上から仏を念ずることとならんで、釈尊がおいでになる頃からきめられたことに、三帰三宝ということがある。つまりくりかえし、くりかえし、三宝に帰依することである。帰依とはすなわち南無で、三宝に帰依するから「南無三宝」である。帰依とは自分の全心全霊を投げかけて相手にたよりすごることである。帰依の思想、つまり信仰する相手に対する信順の心と態度とは仏教に限らず、はるかその以前からあった。インド古代の史詩『マハーバーラタ』の最古の部分といわれる『ブハガバット・ギーター』に、

「帰依の人は苦行者にまさり、智慧の人よりよく、また業をなすよりも尊し。この故に汝帰依の人たれ、しかして帰依の人の中にありては信心堅固、吾を礼拝し、衷心こころしん吾に帰するものは、吾これを以て最上帰依の人となす」(第六章)



南無三寶

浄土教の流れ

△六▽

竹たけ中なか信しん常じょう

(大正大学教授・文博)

—〇一〇—

自分の信ずる相手は、今、現に、西方浄土においてなる阿弥陀一仏である。——このようにきっちり決めてくると、次に問題になるのは、どうしたら阿弥陀仏の救いが得られるかということである。いくら信じて、まちがった信じ方をしていただけでは何にもならない。阿弥陀仏が示された本当の信じ方をするのである。それは阿弥陀仏との約束をはたすことである。

至心信樂 欲生我國 乃至十念

の中、始めの二句は「信じ切る」ことで約束がはたされているので、わたしたちのすることは終りの「乃至十念」以外にない。乃至十念とは一回ないし十回念仏することである。一回でもよいが、十回が望ましいという意味であらう。

○

さて、いよいよ「念仏」ということに辿りついたわけだが、念仏がなぜ「約束」ということになるのか。『無量寿経』の四十八の願の中には「聞我名号」——「阿弥陀仏の名前を聞いて」——さまざまの功德を得ることを約束した願が、実に、十二もある(二十、三四―三七、四一―四五、



山のパゴダ

ば、そんな男性は齡半端にしてこの世を去るといふ。万事うまくいくとは限らないのである。

午前十一時半、お伽ばなしに出てくるようなメオ族の部落をあとに、再び車にゆられ山の寺までもどる。三百段近い中国産の三彩釉の陶板をはめこんだ「竜の石段」と呼ばれる階段を登る。

六百年ほど前の建立というこの寺は、山頂全域にパゴダを中心に各種の建造物が、まばゆいばかりの黄金色を放って建てられていた。境内からの展望、これまたすばらしく、眼下にチェンマイ市内が広がり、遠山がかすん

でみえる。うっすらかいた汗もひき、すがすがしい気分、山の寺詣りであった。

暑さ一段と増す昼すぎ、チェンマイ市内にもどり、中華レストランで昼食、休憩のあと、チェンマイ大学を訪れる。ちょうど学期末で学生の姿は少なかったが、この構内の広さには驚くばかりである。ブーゲンビリア・フレイグ火炎樹など色とりどりの草木にかこまれた学舎、うらやましい環境とみた。

このあと、タイシルクと銀細工の工場を見学、五時すぎホテルにもどる。一日を共にした小池・五十嵐両氏と別れを告げる。お二人は飛行機を予約済ということで、空港に向った。

私たちは、また夜行バスにゆられてバンコクまで戻ることになる。

夜行のあとの一日の観光、しかもガタガタゆられた一日、さすがに疲れた。しかし、チェンマイでの見聞の数々は、その疲れを忘れさせるに充分なものであった。

九時すぎ、高速バスに乗りこむ足は、往路の不安にみちたものと異なり、一日歩き回った疲れがあるものの、満足感あふれる軽いものであった。

かりで、ただ木々を切り倒し、開いただけのもの、しかも水路と兼用で、あちこちにえぐられた岩が顔を出している。こんな森の中の道を上下左右にゆられ、ゆられて二十分ほど、急に視界がひらけた。前方の斜面に部落が見えてきた。だからとした道を下り、部落に入り、車を降る。

子供たちがかけ寄って来た。黒色の衣装を身につけ、銀製のネックレス、イヤリング、ブレスレットをじやらしやら下げている。大人も同じいでたち、目鼻立ちは整っており、小柄な民族である。この衣装は樹皮を加工して作るということだが、木綿のような布にみえた。

部落内を見て回る。珍しさも手伝ってカメラを向ける。とたんにお金をせびられた。モデル料金をとられるのである。一回約二十円ぐらいになる。うかうかシャッターも切れない。

草ぶきの家には窓がなく、内部はうす暗い。そんな一軒のなかに入れてもらった。十畳ほどの仕切りのない内部は土間となっており、左側が物置、右側が居間兼寢所で、大体十二、三人が住んでいるという。

入口の真正面、奥まったところに何かが祀ってある。

ガイドに説明を求めたところ、あまり良い返事がもらえない。タブー視されているらしい。あとで詮索したことであるが、どうやら「かくれ回教」ということだった。回教徒であるメオ族は、幾多の宗教的迫害をのりこえて信奉し続け、今日まで来たらしい。これはメオ族が一夫多妻であることから理解できた。男子二百名、女子四百名という少数民族の性別的バランスもさることながら、四人まで娶ることができるといふ習慣は、回教そのままである。

この結婚の制度が、なかなかおもしろい。回教圏の国々では、男性が経済的になりたてば四人まで娶ることができるそうだが、ここでは男性には、その資格がないのである。女性の方に選択権があり、特定の男性を見初めたとき、仲人をたて男性に申込む。申込まれた男性は、よほどの理由がないかぎり、ことわることはできない。しかし、男性はいつさい働く必要がない。生活費は女性が、自分が生んだ子供の分と、夫に対する自分のノルマを稼いでくれるからだ。男性の仕事は、複数の妻の折り合いを考え、特産のアヘンを吸っていれば良いという。なんともうらやましい生活ぶりであるが、ひと言加えれ



メオ族の母子

標高三百メートルにあるため、気候は大陸性で朝夕は涼しいと聞いていたが、その通り。バンコクとは比較にならない心地よい天気であった。チェンマイとは「新しい町」という意味だそうだが、新しい町どころではない。十三世紀末にメンガライ王によって始められた、ランナータイ王国の首府として、独自の文化を誇った古都であり、随所にその面影を残している。城壁跡やそれをさけて作られた曲りくねった道、そして所々に点在する遺跡が如実に物語っていた。

さて、最初の訪問先は山岳民族メオ族の部落である。チェンマイの北西約十五キロ、海拔一、七六七メートルのドイ・ステープ山の中腹、スリ鉢型に開けた南側の斜面に集落をなして住んでいるという。

市内を抜け、曲りくねった登り坂を、左右に展開する風景を楽しみながら約三十分、山の寺、ワット・ブラ・ダート・ドイ・ステープの門前に到着。ここで小型トラック、ニッサン・ダットサンを改造した車に乗り換える。部落に入る道が細いためである。

ブピン離宮に向う舗装された道から間道に入る。急に車がゆれだした。両手で手摺にしがみつく。道とは名は

軍の検問であつた。共産勢力の物資補給を断つためと、国内不平分子の活動をチェックすることが目的であるという。したがって荷物を満載したトラックや、幌付の小型トラック、そして自家用車などは、殊更念入りに調べられるらしい。しかし私達の乗ったバスは定期便であるため、形だけの調べで、車内には入らず、検問官が運転手と二言三言ことばをかわしただけであつた。

こうした検問所は、急に視界のひらけた場所や間道のある周辺に設けられ、チェンマイまでの間、三カ所で行われていた。政情不安な一面を垣間見たことになる。

さて、夜行バスは午前一時半すぎ、バンコク、チェンマイのほぼ中間あたりのドライブインに停車し、三十分ほど休憩。ここで運転手が交代し、さらに北上。夜がしらじら明け始めた五時半すぎ、ようやくチェンマイの郊外に入った。長旅もまもなく終りだ。とたんに眠気が増してきた。うとうとしたらしい。「着きましたよ」という声に眼が醒めた。

荷物をまとめ、バスを降る。待合室に入り、予約しておいた案内人待つことにした。しかし、なかなかやって来ない。十分、二十分。バス会社の人も心配して、あ

ちこち電話をしてくれている。三十分ほど経ったころ、ようやく仮眠するためのホテルのボーイが迎えに来てくれた。人なつっこいようなクリクリした眼のこのボーイは、待たせたことを詫びることもなく、手まねでホテルへ案内してくれた。

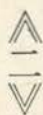
スリウオングス・ホテルは待合室から二分ほどのところであつた。チェック・インし、朝食までの一時間半あまり、部屋で休む。

八時半すぎ、朝食をとるため階下のグリルに降る。先に来ていられた佐藤夫人が、見知らぬ人と、いかにも親しそうに話されている。日本の方であつた。その方は東京学芸大学附属高校大泉校舎に勤務されている小池さんという、高校の先生であつた。小池さんは文部省初等中等教育局の五十嵐さんと二人で、海外在留邦人の子弟教育指導のため派遣され、週末を利用してチェンマイに來られたということであつた。

見知らぬ土地で、地図をたよりの旅客同士、意気投合し、一日を同行することになった。九時すぎ、予約しておいた日本語の話せるガイドが迎えに來た。古い型のベントンのマイクロバスに乗り、ホテルを出発。



南国旅情



|| 世界仏教徒会議隨行記 ||

はせがわのぶ
長谷川宣丈

チャオ・ブラヤ（メナム）川下流にひらけた水の都バ
ンコク。東洋のベニスともいわれたこの都の繁華街は、
午後九時をすぎても人と車の往来は激しい。そんな中を
バスはクラクシオンを鳴して走りぬける。

タイ第二の都市チェンマイまで、バンコクより北へ八
〇九キロ、およそ九時間半のバス旅行である。

タイ国際空港を右手に過ぎたあたりより、外界は暗く
なる。いつしか都市部を走りぬけ、郊外に出たらしい。
バスは速度を急激にあげる。メーターは百二十キロ前後
を指している。ふだん経験している速度ではあるが、ス
ーパーハイウェイとはいっても、日本のそれとは比較に

ならない道路状況での速さである。すべて、鼻歌まじり
の運転手がたよりとなった。

通常のライト以外に、特大の補強ライト二個に照され
た道を、バスはさらにひた走り。明日の行動を考え、寝
なければと思うが、なかなか寝つかれない。後部の座席
をふりかえると、現地の人々はすでに眠りに入ってい
る。ただ私達以外の外国旅行者の一行五名だけが起きて
いるようだ。目が合う。両手を上げ、お互いに寝つかれ
ぬいらだちを確認し合う。

突然、バスが速度を下げた。前を見る。赤い点滅ラン
プが行手を遮るかのよう、異様に光っている。タイ陸

仕事が、看護の仕事に移っているのではないかという気がする。かつて信仰と医療との結びつきは強かったが、いまの病院をつくりだしたのはキリスト教だといっても過言ではない。ローマ時代、貴族や王族の娘や夫人たちが、病人や貧しい人々の世話をしたのは、持てるものが、持てる余りの一部を持たないものに恵んでやるといういわゆる慈善事業ではなかった。文字通り、夫や父の止めるのもきかず、家を出てなりふりかまわず看護に専念し、自らもその病いに感染して死ぬほどであった。この人たちのお世話をすることが目に見えない神に触れられるほんとのサービスだと信じたからである。いわばライ病患者の痛ましい姿に、十字架上のわれらの罪をあらがない給う神をみたからである。こうしてシスターから看護婦が生まれていまいのちを扱う仕事で忘れられているのは、このケア (care) であり、思いやり (sorgen) である。そして必要なのは、ほんとの意味でのライフ・サイエンスではあるまいか。日本には光明皇后や法均尼のような方はもうでないのだろうか。

「浄土」教化トラクト

『おぼん』

B 6判・表紙共八頁

定価一部二十円 (二〇〇部以上 十八円)

送料実費

「好評発売中」

松濤弘道著

新刊『仏教的生き方とは?』

△浄土選書1▽

新書判 二六八頁 価四八〇円

発行所 浄土宗 宗務庁

ラリーで払われるものと (salaried profession) と謝礼という形で払われるもの (fee-taking profession) との区別がある。つまり後者にあたるものは、医師、弁護士、芸術家に対する報酬のあり方であって、その仕事に一定の代価がきめられないということである。払う側のその仕事に対する感謝の気持と、その経済能力に応じて払い方が違っているという建て前である。実はここに、近頃流行の自由診療の根拠がある。いまでも農村では、お大根やお味噌やお米をさげて医家へお礼にゆく風習が残っているところもある。その仕事が点数に還元できないことは確かである。しかし三時間待たせて三分診療といういまの医療が、はたしてその報酬のあり方に値するかどうかは別である。それに分娩というごく自然な人間の営為をも、そして一切を助産婦にまかせきりで、何も手を下さない医師が、それでも多額の料金を請求するといういまの制度は、どこかおかしいのではあるまいか。大病院が、内科、外科と分かれたいわばデパート式の商品売場になっているという言い方もあながち否定できまい。

かつて洋の東西を問わず、僧侶階層が尊ばれたのは、

その地位ではなくて、「ひとのいのち」を扱う仕事だったからである。生死にかかわる大事を手握っている仕事だったからである。そしていま残っているのは、いのちを扱う仕事ゆえに相手の側の志次第でできる「布施」というシステムだけである。これにさえ相場や代価がきまったり、決めてほしいという要望のあるのは、それがもはやいのちを扱う仕事でなくなってきたからである。

いのちを扱っているはずの医師も、かつていのちを扱っていたはずの僧侶も、どうもほんとはあまりひとのいのちを扱っていないのではないかという気がする。ある手術後の患者が足に包帯をまいていた。患部を診察するために患者の前にいる女医は、大きな声で別の患者を受けもっている看護婦の名を呼んだ。女医は患部を診察する義務はあるが、包帯を解いて患部を露出させるのは看護婦の仕事だからである。しかし、十六世紀の外科医アンブローズ・パレーは、言っている「われは包帯するのみ、神が癒したもう」と。この包帯するというフランス語の panser には、手当てをするという意味もある。こんなところから、いま病院で、ほんとにひとのいのちを扱う

ている、という経験をとるものである。そういう経過のあいだに生まれる感動を、彼は「下降による生の認識」と名づけている。これに対し志賀直哉の「城の崎にて」に代表されるように、致命傷になるかもしれないなかった電車事故のあとの養生に城の崎へきていた主人公が、屋根で死んでいる蜂の死骸をみて感じた生の認識を、作家は「……忙しく立働いている蜂は如何にも生きている物という感じを与えた。その傍に一定、朝も昼も夕も、見る度に動かずに俯向きに死んだものという感じを与えるのだ。……他の蜂が皆巣へ入って仕舞った日暮、冷たい瓦の上に一つ残った死骸を見ることは淋しかった。然し、それは如何にも静かだった」と結んでいる。作者自身が死の危機をそばに感じているとき、一匹の虫なり、一枚の木の葉（O・ヘンリーの短篇にもある）なりが、実在感をもってうかびあがってくる。これを伊藤は、上昇による生の認識と呼んでいる。そこに白樺派の文学のもつ魅力もあるといえよう。つまりいのちが描けているからである。

また「神の痛みの神学」者北森嘉蔵氏が、あの「神の痛み」に至りつかれた過程を、実は幼少の頃から祖母につ

れられて、歌舞伎に通われて得られた感動にあるとお聞きして、なるほどとうなづき、あらためてそのご本を読ましていただくようなことだった。たとえば、「寺小屋」の菅秀才や、「熊谷陣屋」の平敦盛や、「すしや」の平維盛の中に、主君のためといえ、あるいは戦いのためといえ父が子を殺さねばという身の「つらさ」こそ、北森氏にとっては、とりもなおさず神がその愛し給う独り子を十字架上で死なしめ給う時の御心に通うものであった。あの「仙台萩」の話にしろ、あれは子殺しを奨励したのではなく、義理の世のしがらみの中で、生きてゆくことの「つらさ」から、なにより「いのちのせつなさ」を教えているものにとれないであろうか。一概に封建道徳を教えるものとは言い切れないものがあるのではなからうか。

いのちを扱う仕事

人のいのちには代価がない。人一人の生命は地球よりも重いということばには、やはり千鈞の重みがある。だからこそ、人のいのちを扱う仕事をする人には、お金の支払い方が違うはずである。専門的な職業についてもサ

この幼稚園の先生のお話は、いまアメリカなどで流行のティーン・エージャーの未婚の母親のことと言っているのではない。れっきとした母親、主婦のことをいっているのである。母親になる教育とは、あなたがちお産、育児の仕方のことをいっているのではない。そんなことを書いた本なら書店の書架にいっぱいある。育児は、単に児童心理学の教えるテクニクではない。欠けているのは、古いことばでいえば児童観（例えば餓鬼とみるのと子宝とみるかによっても大きな違いがでてくる）であり、とりわけ「新しいいのち」の親になる自覚、覚悟の不足ではなからうか。生物学上の母親になるだけなら、何も人間を待つことはない。

無痛分娩や、人工授精の普及によっていよいよもって、母親は、人産み機械になってゆく。医師の中にも、「腹を痛めた子」という自覚をもう一度とりもどすべきだという説もでてきている。この実は、いのちの尊さを教えてくれたのがほかならぬ宗教というものの役割ではなかったであろうか。

英国の作家A・ベネットは、文学に二種ありといい、「感激を与えるもの」と「知識を与えるもの」に分けて

いるが、こうした分け方のはじまりは、エマースンの「力」の文学と「知識」の文学の分け方にあるという。しかもほとんどすべて偉大なる文学の中には、この二つの性質が仲好く見出されることになる。たしかに「いのち」の描けてない文学は人を感動させない。信仰もいのち尊さを如実に体験しないものは真実のものではない。そこに信仰が知識ではないことを思い知らさせる。

いのちのせつなさ

わが国では、いのちの尊さを文学や演劇の世界でどのように表現してきたであろうか。よくいわれるようにわが国の私小説には、不思議な生認識がある。かつて伊藤整は、太宰治や田中英光の小説のような破滅型の私小説が、読むものに与える感動をつぎのように説明している。つまり、普通の平凡な生活の中にいる人間が、その虚偽にたえきれず真実をもとめて、その生活からぬけ出し、自分の不満な生活を、つぎつぎにこわしてゆく。そうして生活をこわして、だんだん下の方に落ちてゆきながら、それが全部わかったときは、もう死のそばまで来

れられております。そうであるならば一度慢心に陥ると、その害悪は広く深いことを思わなければなりません。公害の法理論をむやみに振り廻したり、人権尊重を自分だけに都合よく強調したり、或は契約自由の原則にずるく逃げ込んだり等々がありはしなかったかと、つらつ

ら省みるときいさか後めたい気持ちにさえなります。私たちは、現在のゆがんだ物質万能、そして人々の不毛の心をただ評論するだけでなく、私たち法律家もここに至った責任を負担しなければならないことを強くそして深く自己反省する必要があると思います。



いのちの教育

小^お野^の泰^{やす}博^{ひろ}

(図書館短期大学教授)

子供が子供を生む

ある幼稚園の先生にお聞きしたことばである。「この頃の母親は、子どもが自閉症になったりして、どうしよ

うもなくなると相談にくる。子どもの育て方がてんでわかっていない。要するに子どもが子どもを生んでいるんですよ」と。男女平等という結構な世の中になって、妻になったり、女になったりすることまでは学ぶようだが、母親になるための教育はおろそかになっているらしい。

昔は「つわり」になっても薬など飲まずにお母さん方はみんな頑張ったものです。ところが大日本製薬がサリドマイドという「つわり」を和らげる薬を売りだしたら、とたんに奇型の赤児が続出しました。

また、一昔前までは仲々医者にも行けなかったから注射で片輪にされることもありませんでした。ところが現在では健保の普及のため、クシヤミ一つでも医者に行かなきゃ損とばかり医者に行き、注射の一本もしてくれないと医者にかかったような気にならないものだから、医者には必要があるうがなかるうが、ブスブス注射を打つ。その結果目下何千人という四頭筋萎縮症患者が発見されており、既に裁判でも問題になっております（私も直接関係しております）。

人間のあくなき物への執着、利潤の追求によって、世の中は豊かになり、便利な物が出来てまさに物質文明は華やかに花開いております。しかし、その帳尻では人の健康を害し、人類の生存にさえかげりをもたらしつつあります。いやそれよりもっとこわいことは人の心の退化です。人々の心は乾き、冷え切ってしまった感じます。自分達夫婦はせいぜい楽をしよう、ジジイやババア

は養いたくない、黒いビーナッツの為には権力さえも利用する。出世のさまたげになる邪魔者は殺して棄てる。といったように全く自分さえよければよいという世の中になってしまいました。

三

最近このような社会状況ないし心の問題について、いろいろな面から反省が行なわれております。そして悪の根源は大メーカーないし大商社に存するがとき議論が盛んになされております。私は大メーカー、大商社にその責任の大半が存することを一日も早く自覚してもらうことは勿論必要ですが、それよりもっと大切なことは私たち一人一人が静かに自らの心を省みることではないかと思ひます。

特に、私たち法律家すなわち弁護士、裁判官、検事等は、法律の専門職であるという面から社会の指導者たる立場にあります。こと法律に関する限りでは、同じことをいっても弁護士であるということだけで、肩書のない者がいうこと以上に説得力があり、又世間からも受け容

私も敗戦で身も心もうつろな状態で外地から郷里敦賀に復員し、為すこともなく二年ばかり百姓をやっていたが、やはり鉄は熱いうちに鍛えなければと思ひ直し、昭和二十三年上京、大学に入学いたしました。当時東京はまだ一面の焼野原、それはひどい食糧難で来る日も来る日も、目玉が映るような「スイトン」では若い胃袋を満たすことは勿論、飢えをしのぐことさえ出来ない毎日でした。

その頃には、私も花森氏同様、「最少限の衣食住さえ手に入れば、あとはそれ以上の金は欲しくない」と思っていました。そして昭和五十一年の今日、おかげさまで私も借金をしなくても、事務所では弁護士、事務員たちに高からざる給料を払い、ビルの家主には高い家賃を支払って法律事務所のやり繰りをなし、家庭にあっては、女房子供五人を養い、田舎の老母にもいくばくかの送金ができるようになりました。

本当なら後は何も欲しくないはず。ところが私の心の中に「もっと金が欲しい」という気持がないかと言われれば残念ながら、まだまだあると言わざるを得ません。いやそれどころか、もっとよい背広を着たいし、もっと

大きな豪華な邸宅に住みたいといった金欲物欲が心の中にうず巻いているといった方が正直なところでしょう。

かように、人間の金と物に対する欲望と執着は、第一の満足が次の不満を生み、第二の満足が第三の不幸を生むという、どうにもしようのない業を本質的に持っているようです。

そして、それは地位と名誉と権力に関しては、もっともっとみにくい陰險な形で私たちをとらまえて離さないということが、ほんとうの姿ではないでしょうか。

一一

一体考えてみると、人類はお釈迦さまの時代から今日まで進歩してきたのか、それとも退歩してきたのか。一概には言えないが、私は物質文明は確かに進んで来たが、心の世界においては退歩したと断ぜざるを得ません。便利なものを作ろうとして一生懸命チツソを作ったり、石油化学の工場を作ったりしたら、イタイイタイ病と水俣病、そして四日市ぜん息といった奇病が大量に発生しております。

現代とこのころのシリーズ

〔五〕



法律家のこころ

村 下 武 司
むら した たけ じ

(弁 護 士)
第二東京弁護士会副会長

一

花森安治氏は、その著『一銭五厘』のなかに「戦争中灯火管制のない、灯の下で、銀シャリのめしが食えるようになったら、おれは死んでもよいと思った」と書いています。戦争を生き抜いて来た人たちの偽らざる実感だ

ろうと思います。

ところがそれから三十年、電灯はおろか、赤い灯、青い灯のネオン・サインが巷に煌々とあふれ、またあこがれの銀シャリは、いや減産だ、いや古々米をどう処分したものかと食糧庁が心配する程あり余る程になったが、幸福感の余り、首を縊って死んだという人の話は未だ聞いたことがありません。

いようですね。そこで、逆にお伺いしたいんですが、性欲に悩まされて、仏道修行が妨げられる場合もありうると思うのですが……。

——そうですね。小乗仏教ではあくまでも欲を否定するのですが、また、それに対処する「不淨觀」という觀法もございますが、大乘仏教では「欲望」に対してある程度、幅のある解釈が試みられています。それについてはここでは詳しく説明できませんが、たとえば浄土宗の宗祖法然上人がこれについて興味あることをおっしゃられています。ご自身は持戒堅固な方で一生妻帯なさりませんでした。が、お弟子や信者の方々には、「欲望に妨げられてお念仏が申せないのなら、妻をもらってお念仏を申しなさい」とおっしゃっておられます。つまり、お念仏を申すことが大事なのだといわれています。

確かに、性の問題をはじめとして、私たちが生きて行くには、色々な障害があると思うんですね。私は仏教のことは詳しくはわかりませんが、ともかくそうした人間が生きて行くためにはどうしても避けられぬ事柄に対して真っ向から目をすえて、正しい深い姿勢で解決して行

こうという努力が、もっとも大切なことであると思うのです。

——おっしゃる通りだと思えますねえ。

性の問題に関しても、目をそむけるのではなく、むしろ積極的にかつ健康的に立ち向って行く勇氣が重要なですね。そうした方向に若い人たちが素直に進んで行けるように、私たちが努力しなければならぬと思うのです。法然上人の取られた立場も、そういう肯定的な明るいものだったのではないのでしょうか。

——確かにそうですね。有難うございました。時間も来ましたのでお話は尽きませんが、この辺で……。

『北沢杏子女史は、幼児から成人までを対象とした新しい性教育のあり方を模索され、すでにすぐれた業績を発表しておられます。『こんにちには、性教育』、『なぜなのママ?』、『白夜のエロスたち』をはじめとする多くの著作や、一九七四・五年度教育映画祭で文部大臣賞や教育映画優秀賞を受賞された性教育スライドシリーズ（『ステキな女の子』等）などを製作され、この分野に健康的な正しい指導姿勢を導入されております。』

△文責編集部▽

に対する責任などということについても教えていこうと思つています。つまり、豊かな価値観を持つことによつて豊かな性を選ぶことができると思うんです。そうなつてきますと、その人がいかに豊かな価値観を持つかにかかつてくるのですから、性教育という限られた場での問題ではなくなつてくると思いますね。人間生活の根本の姿勢に関わつてくるわけですね。ですから理想としては、人間には選択することができるといふ能力があるのですから、その人の価値観にふさわしい恋愛・性・結婚を想定され、そして、その中から自分で選び取つていくことが大事なのではないのでしょうか。でもやはりこういう恵まれた選択というものは、そうそう簡単に実現するものでもないわけですし、へんに情報過多の現代の若者にとつては、今は非常に選択が困難な時代なんでしょうし、その困難に対して私たちは何かしてあげなければならぬと痛切に思うわけなのです。

——まあ、性の問題というのは、アダムとイブの時代からのこととして、時代時代によつて、また地域の相違によつて様々な条件の変化もあるので、価値の設定には困難があるのでしょうか。ましてや現代の

激動の世の中に、昔の価値でそれに対応することは不可能なことです。お釈迦様は結婚なさつて一子を設けられてから出家されていまして、聖人と呼ばれる人が完全にそういったことから超絶しているように思われる中で、釈尊の場合は興味深いものがあるように思えます。

ところで、北沢さんは取材のためにヨーロッパを旅されたのですが、キリスト教と性とはどういう状況だとお感じになりましたか。

キリスト教圏——特にカソリックを信奉する国々では『旧約聖書』の「オナン」の記事をみてもお分りのように、性に関して厳格なのですが、これはローマ教会の影響の強かったヨーロッパ南部においては、性教育の取材にならなかつたほど、今日でもまことに厳しいものが残つています。北に行くほど、そういった厳しさがみられなくなるのは言葉の問題がまず考えられます。比較的自由な精神を尊重していたプロテスタントのルターが分りやすい言葉で聖書を翻訳したこととその原因があるようですね。ですから、スウェーデンなどの学生は性の悩みからくる不安などで勉強が妨げられるといったことはな



のですが、これはいい換えれば正しい性は認めていることになるわけですね。ところが今は、正しくあるべき性が正しく行なわれていないわけで、その辺に北沢さんが問題とされるところがあるのではないのでしょうか。

そこでまず問題となるのは、その正しさの基準が何によっているのかということなのですが、このことはたとえば私が以前教壇に立った和光高校の生徒たちにも現われているんですね。その生徒たちは文学に描かれてある性について調べているうちに、「芸者を買って情を

通ずる」というようなことに、自分たちが持っている感情——好きな人と恋愛関係にありたいというもの——に

照して、どうしても不可解だというですね。それで思いあまつて父親に芸者を買うということは、どういうことか、お父さんはそういう経験があるのかと聞いたところ、「馬鹿」って叱られたというんですね。そういうことを考えてみると、一体正しい性とは何なのだろうかということを考えさせられますね。

——それでは、北沢さんご自身はその正しさの基準について、どう説明していこうとされるんでしょうか。

そうですね……「何が正しいか」ということは、それぞれの価値観の問題になってくると思うんですね。だから私は結婚が目前の問題となっている年頃の若者たちには、純潔でいた方がいいとか、純潔でなくともいいといったことに関しては、直接には教えないつもりですが、小さな子供には、どうしてお父さん、お母さんがいるのか、どうして赤ちゃんが生まれるのか、というようなことをやさしく教えていきたいわけです。また、中学生ぐらいの子供には、現実的な問題となってくる性欲について、それが人間の活動の本源であって、その巨大なエネルギーはその人の価値観によって色々にコントロールされること、さらに高校生になってきますと、社会的な性

いていただきましてまことに有難うございます。

ご趣旨に沿って充分にお話できるかどうか大変心配
なんですが、こちらこそ、どうぞ宜しくお願いいたしま
す。

——仏教の方では、五つの戒というものがございまし
て、それらは仏道の成就を願う人間にとってどうし
ても守らねばならないきまりです。どういふものか
と申しますと、「不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語
・不飲酒」の五つです。その第三番目に挙げられて
います不邪淫戒が、淫らな行為を規制しているも
のです。一般的に申しまして、性には新しい生命を
創造するという嚴肅な行為としてとらえる面と、そ
の行為に快楽が附随するという、我々人間にとって
解決しがたい二つの矛盾を含んでいると思われるの
ですが……。そこで、まず北沢さんがお考えになっ
ておられる性についての一般論からお伺いしたいと
思います。

私のやっています仕事で「邪淫」というようなことを
最初にいわれますと、まず仕事にならないんですけれ
ども、ともかく今までの子供たちの親、あるいは現場の先

生方といったそういう年代の人々は、とかく性というも
のを隠そうとする風潮が見られるわけで、それは口に出
してはいけないもの、恥かしいもの、淫らなものとし
て、家庭で、学校で扱われてきたんですね。つまり性と
は淫靡なものとして子供たちに受けとらせているのです
が、その反面神聖なものとして子供たちに教えようとし
ています。ところが、現実社会では性を売りものとする
ようなものが週刊誌やテレビ・映画という情報に乗って
街中に氾濫していて、好むと好まざるにかかわらず子供
たちの目や耳に触れてしまうわけです。いわば「性の公
害」といってもいい過ぎではない状態に置かれているの
です。子供たちがその公害に汚染されているならば、そ
の性の公害の対策として何をしたらいいのか、そのため
にはまず性というものが口に出してはいけないもの、恥
かしいものと考えさせないように教育していくことが必
要なのではないでしょうか。私たちの仕事の趣旨もその
あたりにあるわけですが、これと仏教の「不邪淫」とは
どう関わってくるのか、いかがなものでございましょう。

——それは先程申しあげました「不邪淫」という言葉
が示しておりますように、よこしまな性は規制する



(浄)
(土)
(訪)
(問)

—— 幼児教育・性教育評論家 ——

きた
ざわ
きよう
こ
北沢 杏子 子女史に聞く

聞く人

安居 香山

仏教と性

—— 本日は、教育評論家というよりは、幼児教育や性教育の分野において、新聞紙上をはじめとして諸方面でご活躍をされている北沢杏子女士をお訪ねして、いささか大げさではございますが、「仏教と性」というような表題を掲げまして、色々とお話しをお伺いしたいと思います。北沢さんはみずから性教育専門出版社アーニ出版の代表者として、すでに数々

の教育図書を出版され、このたびも北欧を中心として取材旅行をなされて来ました。仏教にも少なからぬ関心をもっておられ、キリスト教圏の事情にも精通された見識をお持ちですので、こうした面から色々との肩のこらないお話をお伺いしたいと思います。

お忙しいところ、私も雑誌のためにお時間を割

ものの、「実はこれらの経典はすでに読んでいて、存じ上げている」とのことであった。また大野先生の依頼で、観経に対する文学者としての所感をたずねたことがあるが、先生は「観経は実に華麗な文章をもって説かれた経典である」とのことであった。

その後のある日、先生宅に参上すると先生は昼食の最中であつた。先生は夜間に執筆することが多いので、食事の時間は定まっていなかったようである。私にとっては間食となつたが、ご相伴に預かつてパンをご馳走になつた。側には千代子夫人が椅子に腰かけていた。夫人は配給の玄米を一升瓶に入れ、これを両膝に挟み、杖を瓶に差し入れて両手で持ち、玄米を搗きながら精白していた。夫人はたえず手を動かしながら、真面目な顔をして私にいわれるには、「主人はいつも極楽往生をしたいといっているが、ほんとに地獄極楽があるだろうか」という質問であつた。私は困つてしまい、パンが口に詰つたふりをして黙っていると、先生は「極楽を信じないものに極楽往生ができるわけがない。お前まで来なくてもいい」と笑いながら返事をしてくれた。

これは後になつて聞いた話であるが、学生たち数名が先生を訪れ、恐らくは文学編でもしたのであらうが、何かの序に学生の一人が「地獄極楽は説教の方便であつて、実際にあるわけがない」といった。すると先生はその学生に向つて、「自分が鈍感であることを自慢するものでない」とたしなめた。またある時、先生は私にこういわれた。「このようにいうと便宜主義のように聞えるが」と前置きしてから、「極楽を信ずることによって、毎日の暮しが楽しいものとなり、明るいものとなる」ということであつた。

先生から私の国旗に「善戦不屈」の句をいただいた時に、先生に深謝の意を述べたことは当り前であるが、つい「戦争に勝てる望みを持つことはできません」と、いわなくてよいことをいつてしまった。すると先生は私の言葉を咎める様子もなく「その内に敵兵がこの入口にまで来るかも知れない。しかし自分は負けなれないと思つていれば負けたことにならない。何ごととも自分で負けたと思えば、その時から負けるのである。すべてのことにあくまで努力するという不屈の精神を持つていて欲しい」といわれて笑つた。その笑顔がかえつて淋しげに思えたのは、私の気のせいばかりでなかつたと、今でも思つてゐる。

の内容は要するに軍部が余りにも中国の民情について無知であるために誤った施策が多いということ、日本にとって真に畏るべき事態の到来は、中国の少年が成人となり、やがて指導力をもつようになった時期のことであると説いた。また日本は満洲を含めての中国から一切手を引くことになるだろうと予言した。やがて増上寺で開かれた講演会における大川氏の論旨も、大体これと同じ内容であった。

こうして教学院の発足となったが、当初の教学院では宗学部門の首座に大野法道先生がなり、歴史部門の首座に藤本了泰先生がなった。まず手始めに大野先生を講師として、観経疏を読む演習が天光院において開かれた。これに集った先生たちは大正大学の新進学徒であったが、真野先生は設立者であったにも拘らず常に大野先生と向き合って聴講の席に座をしめられていた。

私の国旗には先生から餞別の辞として「横截生死流」の句を頂いたが、その時先生は「これは經典の字句をかりたものである。君も知っているだろうが」といって笑われた。私はこの時の先生の笑顔が、今でもありありと目に残っている。



佐藤春夫先生は日本芸術会員であり、文化勲章を受賞されたが、昭和三十九年に七十三歳で亡くなられた。先生は昭和十年に『掬水譚』を、三十六年に『極楽から来た』を刊行されたが、いうまでもなく両書ともに法然上人伝である。本誌の創刊当時には毎月のように執筆されたが、その後は次第に間があくようになった。しかし先生の言葉をかりていえば「定期的に執筆するつもりでいる」とのことであつたし、人知れずいつも支援を続けておられたのである。

戦時中のこと、「阿弥陀さま」と題して、童話風に書いてみたいということで、これを本誌に連載したことがある。その時先生は、法蔵菩薩についての資料をもっと欲しいというので、私は近くに住まわっていた大野先生にお願いをし、大蔵經三冊を拝借し、すぐ先生のところに届けた。すると先生は私に対して一応の礼言をいわれた

生方の面影を偲ぶことが多い。気持としては国旗を前にしてご回向申し上げたいとさえ思っている。



真野正順先生は大正大学長にもなられ、一生を勉学と教育に努められ、昭和三十七年暮に七十歳で亡くなられた。昭和九年頃に仏教復興という声が澎湃として起ったが、先生はこの気運を宗門としてしっかり掴み、ますます発展させるために法然上人讃仰会を組織されたが、これは誰もよく知っていることである。

昭和十七年頃といえは、すべての報道機関があげて皇軍の武勲をたたえ、国民もまた日本の不敗を信じていた頃である。その頃私は先生から全く意外なことを聞かされた。それは敗戦後の日本国民はどのような態度をとるべきかという問題であった。たとえば戦争に負けてもゲリラ活動を続け、根強く根気よく抵抗を続けてゆくのがよいであろうか、あるいはまた従順な態度を持して漸次に時宜に適した方策を講じて復興に努めるのがよいであろうかということであった。しかし出征の準備をしていた私にとっては、先生の言葉が耳に入るわけがなかった。しかし先生は外国の歴史を引用し、実例をあげて初めて経験する敗戦という事態について、まるで独り言のようにして思案されていた。

その内に戦況は日増しに激化した。そこで先生の次の思案は学問特に宗学が衰微することであり、一度できた学問の空白は、時間をかけても取り戻すことが至難であるという心配であった。そしてこの空白を少しでも埋めるために設立されたのが浄土宗教学院であり、今日の隆盛をみるに至った教学院の基礎を創ったわけである。そのためにまず講演会を開催することになり、講師には望月信亨先生を招くことにした。たまたま幹事を仰せつかっていた私は、早速に神戸藤元寺に望月先生を訪ねて懇請したが、事情があつて実現することができなかった。そこで今度は趣向を変えて大川周明氏に講師を依頼することになった。その頃、大川氏は毎週必ず上海に赴き、中国の要人と接触していたので、唯一の中国通であつた。私が大川氏を訪ねたのはもちろん初対面であつたが、それにも拘らず私を前にして熱っぽい口調で中国を語り、時勢を慨嘆し、日本の将来について心痛していた。話

二人だけであつた。私が大切にしている二枚の国旗のうちの一枚には、次の先生の署名と揮毫とがある。

「横截生死流」真野正順。

「善戦不屈」佐藤春夫。

「威耀朗十方」増上寺沙門徹水（増上寺法主大島徹水師）。

「我行精進忍終不悔」浄山老納性譽（清浄華院法主六花真哉師）。

「光寿無量」演阿弁康（中村弁康師）。

そしてもう一枚の国旗には、次の先生の署名と揮毫と、色彩された絵まで認められている。

「劔には黄菊をそへて佩き給へ」吉田絃二郎。

「虎の彩色画」一平（岡本一平画伯）。

「報国の丹心すえて紅葉照る」浄山老納八秀道人（六花真哉師）。

「一誠貫終始忠烈伝統美」堀口九万一。

昭和十八年のこと、四囲の情勢から私に再度の応召があることは間違いないことであつたし、今度こそは骨を戦地に枯らすものと覚悟を決めざるを得なかつたので、予め用意をしておくつもりで、この国旗を諸先生の宅に持ち廻り、餞別の署名をお願いしたのである。餞別といっても赤紙を受けとったわけではないし、平然たる態度を装っていられたものの、矢張り家に帰れば軍刀の手入れを怠らない時分であつた。従つて恩顧を受けていた諸先生に逢う毎に、内心ではほんとに一期一会のつもりであつた。それだけに国旗に餞別をいただいた時の印象が強く、今でも昨日のことのように目に焼きついている。近頃ではひそかにこの国旗を取り出しては眺め、先

二 編集後記 二

○梅雨入りのうっとうしい季節を迎えた。
カビくさいジトジトした気候は、いやがう
えでも私たちの気持ちに重くする。降り続
く長雨にもの想いに耽（ふけ）って、かっ
て、小野小町は、

花のいろはうつりにけりないたづらに

我身よにふるながめせしに

というような歌を詠んだが、道を行けば車
にハネをあげられ、乗り物にあつては傘の
雫をかけられたり、私たちの心のイライラ
は立ちこめる雨雲の暗さに等しい。しかし
雨に濡れた身体をかわかすように、濡れた
心もいやさなければならぬ。しかも心の
問題はあくまでもその心自身によって解決
しなければならぬ。それはある意味では
やさしいことでもあるが、現実にはなか
なかむずかしいことなのである。こうした
心のあり方への働きかけとして、信仰とい
うことがどのような役割をもつかというこ

とは私には測定できない。今はひたすらに
念仏して、穏やかな心持ちを得ようと努力
したい。

○水をいっぱいいたえた青い田んぼも、
郊外の風景からは年々消えて行く。しかし
稲作民族である私たちは、永い間米を主食
として生きてきたし、現に今もそうである。
米どころの水田地帯では、今頃は田植えの
もつとも忙しい時期であらう。

早乙女の股間もみどりに透きとほる

澄雄

田植笠紐結へたる声となる

汀女

○僧侶の着ける袈裟を福田衣という。初期
仏教時代の修行比丘たちが、ぼろ布をつな
ぎ合わせて衣としたことになつて、今で
は、金襴のどんな立派な袈裟でも必ず田ん
ぼ形の小さな四角の布地を縫い合わせて作
つてある。田が水を貯えて稲を潤すように、
仏法によって人々の心が潤うことが喻えら
れている。袈裟を被着して、法水に潤い、
心の田を耕すことが大切である。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 六月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十一年五月二十五日 印刷

昭和五十一年六月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒三三 振替東京八一八二一八七番

一の丸出版 藤原猶雪著

『日本仏教史研究』《限定500部》

菊判 716頁 布製上製本
定価 6,000円 (送料300円)

〒460 名古屋市中区栄3-28-19

発売元 其弘堂書店

振替(名古屋)10220 電話(052)241-4694

漢和対訳 『和訳浄土三部経』村瀬秀雄訳著

B6判 474頁 上製函入 定価 2,500円

檀信徒への記念品、贈呈用に是非ご利用下さい。
万人必読の和文聖典です。

檀信徒心得・訓読・注解つき

『浄土宗^{檀信徒用}のおつとめ』

折本68頁 定価190円(100部以上一割引)

折本80頁 <小消息つき> 定価220円(100部以上一割引)

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

発行所 常念寺

振替(横浜)8293番 電話(0465)43-1352番